

---

# ファミレスのハンバーグはいつ食べてもおいしい

堀田マサヒコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ファミレスのハンバーグはいつ食べてもうまい

### 【Nコード】

N6859L

### 【作者名】

堀田マサヒコ

### 【あらすじ】

ファミレスをテーマにしたショートショート。

＊

「タダ飯がうまく感じるのはなぜだろうか？ 時折食べるファミレスのハンバーグがタダっただけでうまい。」

「悪いね、ただで晩飯食わせてもらって」

「さっきまでホールで料理を運んだりレジ打ちをしていた武が目の前に座っている。バイトが終わり、学生服の武の前にもハンバーグ。午後十時の少し遅い晩飯だ。」

「感謝するのは俺じゃなく、キッチンの奴らだ。ホールは飯を運ぶだけ。にしても圭介、お前こんな時間によくハンバーグ食べるよな。俺みたいにバイト上がりだったらわかるけど、お前食ってきてるんだらう？」

「いや、今日はポテチ食っただけ。予習してるから」

「タダ飯を食わないかと誘ってきたのは三日前だった。学校帰りの特急電車の中で偶然隣に武が座っていて、話の流れでファミレスで働いていることを知った。高校生になった直後にファミレスのホールで働き出したという。それこそ働くのが待ちきれないといった感じだ。」

「武、やっぱりバイトって辛いかな？」

「慣れたらそうでもない。最初は何にも分からないから誰だって辛いけど、慣れたらこっちのもの。昔、親父がよく『三日で仕事を覚えて、三ヶ月で慣れて、三年でベテランだ』って言ってたけど、俺は二週間で慣れた。親父の言ってることも当てにならないかったっばい。まあ親父はいないけど」

「武と知り合ったのは小学生の頃。その時から「親父」は存在しなかった。ぼんやりとした話しか教えてもらってないが職を転々とした拳句、蒸発してしまっただけ。そういうことをまるで気にせず

話してしまうのが武だった。

だからバイトを始めたんだな。とは言えなかった。

「お前はバイトしないのか？」

「いや、部活ばかり。大して強くも無い野球部だけど、何もやらないよりは良かったですと思つて毎日球拾いの日々」

「まあいつかは高校も終わるし、部活も終わるし、大学受験だからな」

「一年生の春に大学受験の心配してもしようがないって」

そう言つとゆっくりとハンバーグを切り、噛みしめるように食べた。

友達と一緒に飯を食っているのに時折、何かを考えるようにゆっくりとした動きをすることがある。野球のことと女のことしか頭のない俺とは何か、どこか、違うのだろうか。自分の心が重くなりそうな予感がしたから、他の話題を振つた。

「そういえば俺、昔コンビニの店員が常連客にあだ名をつけてるっていうのを聞いたことがあるんだけど、そういうのって本当にあるの？」

「あだ名ねえ。まだ入つて二週間だからあんまり常連客とかは分からないんだよな。すまねえ」

「別にいいよ。たださ」

わざと小声で、気になつていることがあると俺が言った。

「何だ」

「ここに来て三日になるじゃんか。で、いつも大体同じ席で食べてるけど、常連客っぽいやつがひとりいるんだよね」

「誰？」

武の斜め後ろを指さす。そこには自分たちと同じハンバーグを食べている白髪混じりのおじさんがいた。

「ホームレス、というより派遣か」

武の言つとおり、身なりからしてあまり綺麗とは言えない。裾が少し破れていて、くすんだ色をしたシャツとズボンを履いている。

「あの人さ。俺がくるのと同じ時間帯に来て、いつつも窓の外見ながらハンバーグ食ってるんだよ。夜中でこちら辺に見続けていたい風景なんかあるか？」

角度から窓の外はどうなっているかははっきりとは見えなかったが、たしか田舎の細い通りが走っているはずだ。向こう側に何があったのか憶えてないくらい、ぱっとしない窓の外を見続けているおじさんとハンバーグ。

「なあ、やっぱ変じゃないか」

「そうか？」

「なんで？」

「だってあそこの近くで何年前に交通事故があっただろう？ そういうのじゃないのか？」

そういえば中学生になるかならないかの時にニュース映像で近所の道路が映し出された。そこで出会い頭の交通事故があり、一人死者が出たという。その時は近所がテレビに映ってるという興奮があったが、そんなことはすっかり忘れていた。第一、交通事故をいちいち覚えるよりも、もっと違うことを覚えさせられうのだから忘れても当然かも知れない。

ただ完璧にどこの場所の映像が映し出されたのか思い出せなかった。なんとなく近所が写っていた記憶はあるのだが。

「あつたな。そういえば」

「そういうこと。事件解決」

武は今度は勢い良くハンバーグを食べた。

\*

献花を見つけたのは翌日だった。学校の帰り道、夕日が沈みかけのまだ周りが明るい時間帯に見つけた。駅からファミレスの前を通って自宅へ向かうのだが、ファミレスのだいぶ手前の交差点。信号待ちをしている最中にふと下を見ると、電信柱の下に牛乳瓶に入っ

た一輪の花を見つけた。

そつだ。今度ははつきりと思い出した。事故は出会い頭。交差点でぶつかったのだ。

その証拠に端の目の前の電信柱には「死亡事故発生場所」と御丁寧に書かれた看板が設置されていた。

じゃああのおじさんは何を見ていたのだろうか？

衝動が湧き上がる。

すぐ携帯電話で武に通話した。

「武？　ちよつと今日早めにそつちに行くからさ。タダ飯じゃなくてもいいから、早めに食ってるよ」

\*

武はいつも十時にバイトが終わる。それを見計らって食べに行っていたが、九時頃にファミレスへ向かった。見渡せば客がいつも以上に多い。だが幸運にもあの席が空いていた。おじさんが座る席が一人そこへ向かい、窓の外を見て驚いた。

窓の外は何も見えなかった。窓の目の前の通りには街灯もほとんど無い。そのせいでファミレスの中が鏡のように映し出されていた。はつとした。

その鏡になったガラスには、昨日まで武と一緒に座っていた席が明瞭に映し出されている。おじさんは窓の外を見ていたのでも、ましてや事故現場を見続けていたのでもない。俺たちを見続けていたのだ。

そのせいで店員のいらっしやいませ、という声に思い切り驚いてしまった。女子高生だと思われる店員もつられて驚いている。その顔を見て現実に戻されて、なるべく落ち着いた風を装って話した。

「すいません、本郷武って今いますか？　ここで働いている」

「ああ、本郷くんなら今日は休んでますよ。たしか家族がどうかしたとかで」

しばらく黙った後に慌ててハンバーグを注文した。窓に映った武  
を見つめる想像をしながら食べてみようと思った。

おじさんと同じように。  
いや。

お父さんと同じように。

きっとハンバーグはただ飯じゃなくてもおいしく感じられるはず  
だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6859/>

---

ファミレスのハンバーグはいつ食べてもうまい

2010年10月8日12時38分発行